

Title	書評： 渡辺秀樹著『モデル構成から家族社会学へ』慶應義塾大学三田哲学叢書、2014年
Sub Title	
Author	三隅, 一人(Misumi, Kazuto)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.194- 196
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：渡辺秀樹著『モデル構成から家族社会学へ』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0194

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：渡辺秀樹著

『モデル構成から家族社会学へ』慶應義塾大学三田哲学叢書、2014 年

三隅 一人

本書は、一人の研究者が歩んだ研究と人的交流の軌跡を通して、時代や社会環境との関係において学問の発展のあり方を読者に問いかけてくる。各章の展開は、著者の学生時代からの研究活動を追う形で進むので、一見すると自伝的であり、そのためタイトルから理論書としての内容を期待した読者はやや戸惑いを感じるかもしれない。(実は評者もそうであった。)けれどもこのタイトルは、著者の研究の基軸を表現しているだけでなく、社会学理論のあり方を問いかけるためのパズルのようなものであることが、読み進むうちに次第に気づかれてくる。評者は家族社会学の専門家ではないが、自分自身の研究のあり方やその軌跡に引きつけて、その問いかけから学ぶことは多かった。

以下、そうした評者自身の学びを交えながら、本書の構成を簡単に紹介しよう。

I 章では、著者の東京大学での学生時代から助手時代、いわば研究の土台づくりの時期がふり返られる。そこでは著者が教育社会学を足場としつつ、ゼミや研究会での理論的訓練と社会調査への関わりを経て、研究主題を「社会化」として固めていく過程が示される。タイトル前半の「モデル構成」への著者の関心と姿勢は、すでにこの時代に培われたものであるようだ。この点に関して吉田民人氏のゼミや小室直樹氏の自主ゼミにおける議論のやりとりやエピソードは印象深い。R・K・マートンとの出会いも重要な契機となっている。実際、「複数のシステム間の移動や相互調整」(34 頁)に関わる第二次社会化の概念、そしてアプローチとしての中範囲理論は、おそらく著者の生涯的な研究テーマであり、本書を読み解く(すなわち前述したパズルを解く)鍵でもある。

それにしても、何とも贅沢な人的交流環境である。登場人物をよく知らない読者は、ぜひそれをいちいち調べながら読み進んでほしい。スマートフォン等を片手に、さほど手間はあまい。それにより、ひとつひとつの出会いが著者の研究にとってもつ重みを、より踏み込んだところで共感できるであろう。

II 章と III 章では「モデル構成」の例解として、著者の社会化と役割に関する主要研究がいくつか示される。II 章の役割モデルは、1981 年の『思想』掲載論文において展開されたものである。これは、役割期待の相補性のダイナミックな側面に着目する R・H・ターナーらの概念化に立脚して、役割を 3 つの要素、すなわち、役割期待、役割観念、役割行動の関連として概念化するもので、その 3 要素間関係のモデル構成から、役割期待の相補性の特殊性とともに、関連構造の移行形態まで論じている。単純ながら情報量の多い優れたトライアド・モデルであり、

三隅一人「書評：渡辺秀樹著『モデル構成から家族社会学へ』

『三田社会学』第 20 号 (2015 年 7 月) 194-196 頁

評者自身の役割研究でもおおいに参考にさせてもらった。社会ネットワーク論や組織経済学の先進領域であるネットワーク・ダイナミクスの点からみても、先駆的な着眼を含んでいる。関心のある読者はぜひ元論文を紐解いてほしい。

III 章では家庭の養育構造の諸類型に関するモデル構成が紹介される。これは 1989 年の『教育社会学研究』掲載論文で展開されたものである。議論の足場は、マートンが役割集合の概念を提唱して論じた、構造的アンビバレンスにもとづいている。より直接的な論拠は、パーソナリティ形成との関係からこの議論を発展させ、「個人の自律性の苗床としての役割の複雑性」(45 頁) という観点を打ち出した L・A・コーザーである。著者は、その観点から子どもをとりまく家庭内外の社会化環境を類型化し、とりわけ核家族における役割環境の単純さが社会化に及ぼす影響を論じている。

IV 章と V 章は既発表の論考の再録である。再録なので詳細は述べないが、主題はいずれも、前述の家庭の養育構造に関して実質的な問題を論じたものである。IV 章は養育役割の母親への集中・独占の問題に、V 章はその裏返しともいえる父子家庭における父親の育児不安の問題に、それぞれ焦点を当てている。概念モデルにもとづく現状分析として、また、あえて計量的なデータ分析に拠らない論考を示しているところに、著者が志す中範囲理論のあり方がよく伝わってくる。

VI 章では理論社会学における機能分析の意義が、小室直樹の定式化に即して論じられる。機能分析は小室的には「実行空間の評価空間への写像」(75 頁) であり、なおかつその写像関係において「評価空間は複合的に存在し、それが変化する」(76 頁) ものとして捉えられる。この柔軟な機能分析の捉え方は、著者のモデル構成における基本スキームだと理解される。私見では著者のモデル構成の魅力は、一定の形式性を保ちつつ、その中で解釈と推論の幅を広くつくりだす柔軟な概念構成術にある。この概念モデルがもつ解釈と推論の幅の広さが、現実問題に対する中範囲理論的な応用の切り口を豊かにしていると思われるのである。その魅力を支えるメタ理論的スキームが、この機能分析ではないだろうか。

VII 章では、著者が慶應義塾大学に職を得た 1990 年以降の、大規模な共同調査研究プロジェクトを軸とした研究の展開が示される。とくに質的調査研究プロジェクトへの関わりから、「調査研究への協力者こそ研究の重要な準拠集団」(88 頁) と総括する著者の真摯な研究姿勢が印象的である。さらに VIII 章では、慶應義塾大学における大学院生との共同研究の展開がまとめられている。

以上、章立てに即して内容を概観したが、冒頭にも示唆したように、本書の全体としての第一義的な価値はその知識社会的なおもしろさにある。著者が学生の頃、理論社会学はパーソンズの社会システム論(構造機能主義)の影響を強く残していたと思われるが、それに対抗的な学説も種々生まれていた。マートン、ターナー、コーザーらは、それぞれスタンスは違えども「主流」たる構造機能主義に対抗的な理論化を展開した点で共通している。その中でも著者が拠り所としてきたのは、実証主義としての議論場に踏みとどまりながら「主流」の批判的再

構成を行うような、ある意味軽妙な立ち位置だと思われる。

このように考えると、本書のタイトル「モデル構成から家族社会学へ」は、著者の大粋的な関心の移行を表しているのかもしれないが、少なくとも単純な研究の転換ではないと理解する。理論とデータ(経験)のあいだには常に一定の緊張関係がある。この緊張関係とのつきあい方は、どういう立ち位置から「理論」を志すかによってだいぶ異なるが、中範囲理論の場合、理論とデータとの密接な関係づけにこだわるあまり、ともすればその緊張関係が軽く扱われがちである。ここにおいて著者のモデル構成へのこだわりは、中範囲理論の生命線が中範囲命題を導き出すもとになる理論(そしてそれを思いつくアイデア)にあることを、改めて教えてくれる。その意味では、このタイトルの趣旨は、モデル構成に立脚した家族社会学というべきものであろう。これが評者の第一のパズル解きである。

この立ち位置は軽妙であるがゆえに、相当な才がなければ操ることが難しく、バランスを崩しやすい。みてきたように、著者の場合にそれを支えているのは、理論的には小室的機能主義をメタ的なスキームとした中範囲理論、そして、そのもとで柔軟に概念モデルを構成し、それを現状分析に応用するセンスではないかと思われる。おそらく著者の自己診断では、こうした才は天性のものというよりは、むしろ「第二次社会化」による、ということであろう。「おわりに」における著者自身の総括を踏まえれば、「周辺」としての「第二次社会化」というべきかもしれない。実は本書は自伝を通して、そうした才がどのような時代そして研究環境のもとで培われたかを、実証している。これが評者の第二のパズル解きである。

最後に、ないものねだりになるかもしれないが、ひとつだけ著者に注文したい。小室的機能分析は、著者自身がその実践は社会学の実践と等価であると論じているように、また、評者がスキームと称したように、一般性の高い理論枠組みである。けれども、それはどういった対象の説明のために、どういったモデル構成が考えられるかについて、具体的な指針を与えてくれるものではない。著者の場合、そのスキームのもとで具体的かつ魅力的なモデル構成が展開される時に、アイデア源となっているのはマートンである。そのようにしてマートンを媒介として使いこなすときの格闘を、もう少し開陳してほしかった。より一般的にいえば、抽象度の高い理論スキームから、あるいは逆に具体的なアイデアから、独自の理論を練り上げていくプロセスについて、もう少し手がかりを示してほしかった。もしかしたら、それにより第三のパズルが読みとれたかもしれない。

評者流のパズル解きをふまえていえば、本書は、自伝による実証的な理論社会学の書である。けれども、これはあくまで評者の読み方である。志す学問分野が違えば、あるいはまた若い読者には、違ったパズルがみえてくるかもしれない。そうした楽しみをもって手にすることができる一冊である。ぜひ、学問を志す若者に広く読んでもらいたいと思う。

(みすみ かずと 九州大学大学院比較社会文化研究院)